特集
米原の未来を変える若者たち
マイバラチェンジャー

夢に向かって まっすぐアプローチ

▲伊吹山テレビはこちら（3月28日号）

プロゴルファー
藤田（ふじた） かれん（24）

2000年8月生まれ。米原市出身。
2021年にプロテストに合格し、今年でプロ4年目となる。
主な成績は、JLPGAツアー（国内女子プロゴルフツアー）2024の明治安田レディスヨコハマタイヤゴルフトーナメントで2位タイ、ブリヂストンレディスで7位タイ等。
2024年の年間ランキングは60位で、「今年は、昨年達成できなかったシード権獲得が第1の目標です」と語る。

観戦用ロープの「向こう側」に憧れて

小学1年生の時からゴルフを始めました。当時兄が近所のゴルフスクールに通っていて、そこに自分もついていくようになったのがきっかけです。

子どもの頃から父によくプロの試合を見に連れて行ってもらっていました。試合会場には、観客と選手を隔てる試合観戦用のロープが張られていて、ロープの中には選手とキャディーさんしか入れなくなっています。観客全員が、ロープの向こう側にいる選手に注目している。それがすごくかっこよく思えて、自分もいつかこのロープの内側で、プロとしてプレーしたいと思うようになりました。

プロへの道しかないと覚悟を決めた

中学生になった頃から、自分の持ち味である「飛距離を活かしたプレー」を意識して磨いてきました。

高校3年生になり、具体的に進路を決めなきゃいけないとなった時に、覚悟を決めて、プロゴルファーを目指すことを決断しました。ほんの一握りの人しかプロにはなれないという厳しさはもちろん知っていたけれど、子どもの頃に感じた「ロープの向こう側の世界」、プロゴルファーという夢のある職業、夢のある世界に、自分も行ってみたい、その世界を見てみたいという想いで、プロへの挑戦を決意しました。

家族の支えが大きな力に

小学1年生でゴルフを始めた時に、父が練習用に家の敷地内に大きなケージをつくってくれました。兄と一緒にその中の的に向かってゴルフボールを打ち込んだり、もくもくと練習していたことを覚えています。

小学4年生になりゴルフスクールをやめてからは、ずっと父にゴルフを習ってきました。父はサラリーマンだったので、ゴルフはあくまで趣味として楽しんでいましたが、仕事が終わってからは必ず私達の練習を見に来てくれたり、母と共に練習場まで送り迎えをしてくれたりと、ずっとそばで支えてくれていました。

実は、小学3年生の時に、練習に行くのが嫌になってしまった時期がありました。その頃にはジュニアの試合に出るようになり、「良い成績を残さなければ」とプレッシャーを感じるようになっていたのと、周りの友だちがみんな学校帰りに遊びに行っている中、自分は練習場に通っていたので、どうしても「私も友だちと遊びたい」という気持ちが勝ってしまい、練習場に足が向かなくなってしまったんです。

そんな時にも両親が工夫をしてくれて、ゴルフから完全に離れてしまうのではなく、練習頻度を減らし、友だちと遊ぶ時間もつくれるように考えてくれました。そうして少し余裕ができましたが、友だちとも必ず毎日遊ぶわけではないので、結局空いた時間に何をしたらいいのか分からず、自然とまたゴルフの練習へ向かうようになっていました。

米原は人が温かく落ち着いて練習できる場所

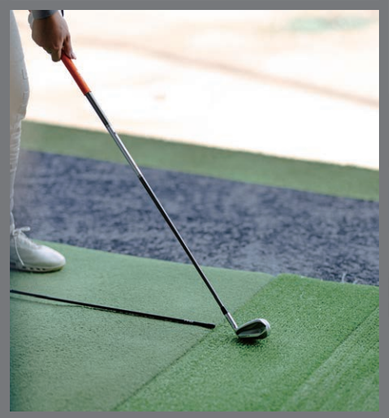
米原は自分にとって生まれ育った慣れた環境であり、落ち着いて練習に取り組める場所です。今も父がコーチをしてくれているので、米原を離れることは今の自分の選択肢にはありません。近くに練習場もありますし、地元の方はいつも温かく見守ってくださるので、とてもありがたいです。

最近、地元でもゴルフの話ができる友だちが増えて、すごく嬉しいです。身近にゴルフを始めたという方もいらっしゃいますし、ゴルフの面白さや魅力を知ってくれる人がもっと増えるといいなと思います。

全力で取り組めば結果はついてくる

ゴルフは個人プレーで、常に自分との闘いです。失敗やつまずきも、もちろんあるけれど、一回の成功がすごく自分の喜びになる。そんなゴルフの面白さを幼少期からずっと経験してきて、そこは今も変わらず、ゴルフの一番の魅力だなと思っています。

もし今何か目標や夢に向かって頑張っている方がいらっしゃれば、それを達成できるように、日々を一生懸命過ごしてもらいたいです。後悔のないように、たくさんチャレンジしてください。何事も全力で取り組めば、きっと結果はついてくると思います。



子どもの頃出場した試合にて（上）
2人の兄たちとともに（下）